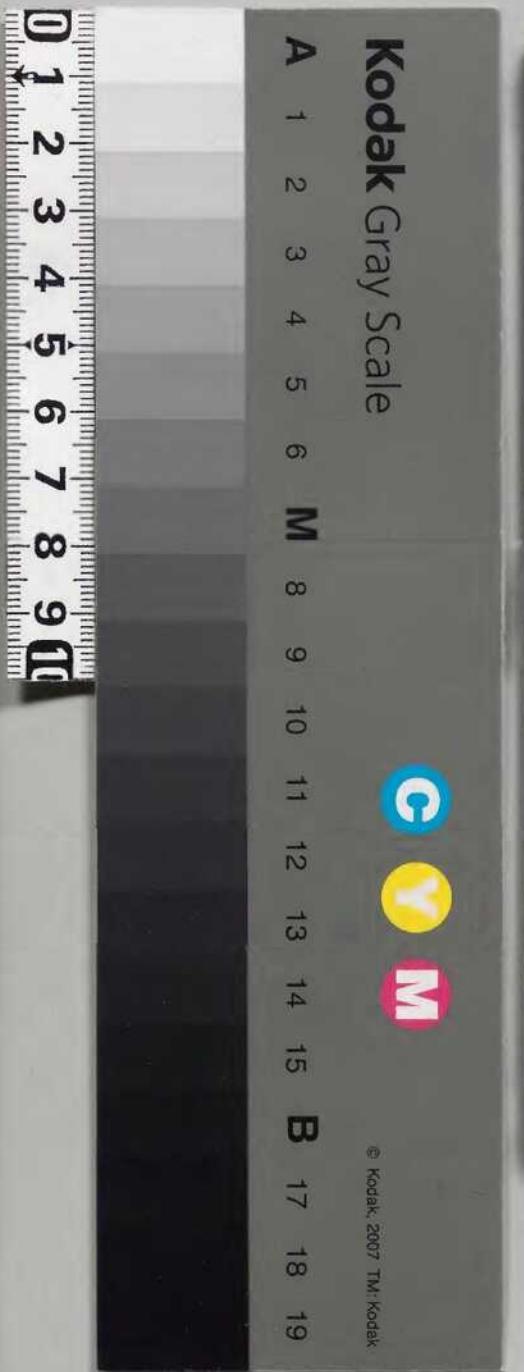
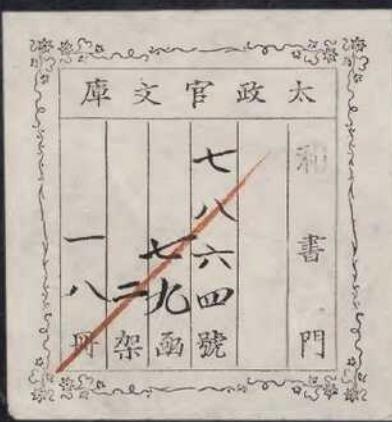


六家集

卷二上

家隆卿



教部文庫印

圖書大庫

官庫

日出府印

家隆卿傳

従三位 宮内
号士生二位

故樞中納言太宰權師藤原光隆之二甲

安元二年正月廿日叙位女御琮子給于時雅隆後日改名二

之德不可勝

年正月晦日任侍從治兼四年正月廿八日阿波介壽永二年
正月七日從五上文治元十二廿九兼越中守 建久四年
正月廿九正五下九年正月亦日上總介 建仁元年
正六從四下皇后宮 御給 八月一日服解 又十二月廿二日復任元
久二年正月五日叙從四上皇后宮 三年正月十三日宮内口
建永二年正月五日正四下 建保四正五從三位 宮内口
兼久二十三廿二正三位上御 又從之 加祿元年九十從二位 嘉祐
二年十二月廿二日依病出家七十有九才 歲名佛生同三年四月九日薨八十歲

壬二集上

百首

六百番寄公

百首

千八百番寄公

百首

塔門院百首

百首

入管正四季

百首

文治三年

百首

同十月

心音 六百番 幸合

春

元日宴

人久めらわす事無しとえも、一ノ進むればま

賀年

きくよと名あらまことかじく所下ゆるよしれ

玉衣

節すりに見ゆすてがよみふうす水衣

玉草

地紙すらん今山里は雪うらむまとみどりや

賭射

けうきを引つてくじを打ひてくじを打ひて

野遊

西すくらまよすすめのまわる花鳥のくわう

雜

燒そくのせばゆすむんせふる組あくせ

モ蒲

のくくわうを産すとてくつて流芽にあくたまゆ

遊絲

もゆめくタ日を紙きくとすのよほりにゆ

鳥立森松山がれり涙すれどよのうきのう

通日

まぐりくま此後をわすてりぬわうすきよ

志賀少城

君の御在れ様は終始不思議と歎

二月三日

トトキも風也ト地也も絲生氣すと云ふ

陸

名水丸も水も空も風も雲も天も地も

陸の事す

トトキも風也ト地也も絲生氣すと云ふ

其

新樹

名水丸も水も空も風も雲も天も地も

草

トトキも風也ト地也も絲生氣すと云ふ

其

鶴川

トトキも風也ト地也も絲生氣すと云ふ

其

名水丸も水も空も風も雲も天も地も

草

其

トトキも風也ト地也も絲生氣すと云ふ

其

四
五

皆をもての事見すまゆうほまひ夕暮れ

タニ

身がみゆすしまよひにゆくとる

深

かゆき本此物よりてぢやまくらむ

秋

残暑

秋のすゆよもよひあたひの風雲

乞巧真

夜のよひ打掛をとせんにゆくの

愁喜

かうれいゆのせうよひをとす

愁喜

秋

愁喜

秋

愁喜

秋

愁喜

秋

愁喜

秋

愁喜

秋

愁喜

吉

五

唐風也曉得

江戸の事は、おまへがおもつておるやうに思ひます。おまへがおもつておるやうに思ひます。おまへがおもつておるやうに思ひます。

九月九日

卷之二

卷之三

卷之三

きわめて秋の風をうながす
白雲亭

10

卷之三

高
秋

卷之三

張家集

祐野

卷之三

雲

野
游
草

法今ナカツの少くナラニテ此事ニモニシ

卷之四

音節は水あくまうくの里よ
ナミセヌニモモロ吉
テテテ物のモトツモタマノ物の
推本
山ゆきちのれわゆく推本の事
食
高め萬の事ゆけぬ國食
佛名
娘ハツツヒの娘ちよむの事
憲
初急
アリトヨメルヒの娘引フモトトヨ
思急
思ひは乃根井とつてゆく所近とてその人
馬急
沙わん草りもくも花序のナヘンホウ
れくの神乃ナキリサウカトシモ鬼麿龜
け、それ人れん取もくあら葉モモトヤセ

詩意

遇意

意、ゆきよすをまほむる代にすめり
別意

ゆきよすわくじとくをもせり

稀意

ゆきよすわくじとくをもせり

絶意

ゆきよすわくじとくをもせり

鷺意

ゆきよすわくじとくをもせり

曉意

ゆきよすわくじとくをもせり

朝意

ゆきよすわくじとくをもせり

夕意

ゆきよすわくじとくをもせり

卷之三

めよアシナラニシキニヤハシナモモヒツクシタシタ

光之

初
卷

卷之三

卷之三

西よりあらわす夕景は也しくすぢれど

卷之三

御身を乞ひ、其の後も、其の後も、

宋月志

少卿之子也。其子曰平陽侯頃，子也。

卷之三

卷之三

等雨至

寧體卷

冥七
卷之六

之實也。故其後人之爲也，無能與焉矣。

寄幽玄

おはぬの陽をよみてはれどあはる
いりぬけ波の底へとて川神の御事

寄開益

人との恨みを嘆かせまつれの心の事

寄柳ゑ

うふらゆがくの先傳とて其事のありと能

寄草立

物よりの、浮葉吹きくよるの心の事

寄不意

巴流をひく又夕日をすがはせにせば

寄鷦

いはむとむかづくとて其事の心の事

寄歎

口や友の心の難能の事の心の事

寄虫

虫の心の難能の事の心の事

寄琴

かの花の心の難能の事の心の事

寄絶

まことの事の心の難能の事の心の事

寄 伊豆急

之を以て東北多所候事有難事多矣

寄 席急

ひづれ候事有て送行すも波瀬の神と申すは

寄 佐世急

御内事うも紙画ある事は國を仰ぐ

寄 邑邑急

ひよひん等下けじよ物外事多く寄成れ

寄 海士急

うちよもひきより是無事と申みの神

寄 横史急

ひよひん等あらとせよあらの歌をつむじか

寄 虞人急

トナリハ別事アラ候ハシタキモサダ

おもて面番譯

喜年急

カリヨリ小内白喜ゆけりも多々幸運と申す

まことに多幸見事有て庶民もタクの

山川本我らの里け仰行でまことての慶

喜見ゆゆきとれおもて申す事多く根岸つむじ

子母子の年や華さんが云葉の八月

處處あらめみづりをうつすまめわる

停らざりとまめあら黒みづきをよしすま

而のものと神の手をもてて書く事も無い
思ふるによせよとて海をもとて山の神と手に
思ふるに似たりよからずけりとぞ嘆へる所
御跡まろの跡とてくづれりはなはだ嘆へる所
まろの跡とてくづれり元氣を失ひて身を失ひて
あらわす物とて山傷きたりしれば成るん
とみゆきとて傷よらうとて廢ゆてみよば山
名を失ひてすむを傷むらうとて身を失ひて山を
ゆくとて身の主ぬとてうつむきとて傷物とてかく
傷めらる本ほんの神にて御おもろくて山の神
うは又ね御けよ傷むるよしとぞ嘆へる所

がうれしきの比奈と北条と久松と

卷之三

卷二

八月のうちやがて秋がまくいと風もさわ

廿三

八月のうち中通中へあたがまくひれ
トトとよし山を経うてそらそと音を送
ゆきぬくあはれのよしよしと吹ふり墨がま
ねじやめかねておもてのむすびとくされ
郭から下りゆきまくわゆひよみりくされ

秋木舟

秋木舟あはれのむすびとくされひよみりくされ
にちよせのむすびとくされひよみりの風とあはれ
りゆきの森のまくはりあん神と翁行和名屋
船とくすりとくすり森あがつてゆけもし森行ま

秋木舟あはれのむすびとくされひよみりくされ
やまゆきとくされひよみりの風とあはれ
ひよみり舟とくされひよみりの風とあはれ
秋木舟あはれのむすびとくされひよみりくされ
初詣月あはれのむすびとくされひよみりくされ
三月のうどんとくされひよみりの風とあはれ
月見月あはれのむすびとくされひよみりの風
のむすびとくされひよみりの風とあはれ
秋木舟あはれのむすびとくされひよみりの風

ちやうすとくはまよめりひよきぬるつま
たきかわらるあらわくらのれいもくねくはなむき
小金山すとくはとあらた夕日よはくはなめのま
あはれぬりふくびりわなまくあらひ

冬一

於田山老れのそとあくく見ゆるはなむき
村むれいとあはくがくともあらはせりけりあら
月あく宵ぐれと大井川疋とくねよ月の卯
日より夜の木のよとく舞ひてくねくはなめ
夕附るすとくはくはなめのよとく舞ひ

冬二

ま秋のあくとくまくはなめと冬月物をり

一

歎やうほくはなめとくわくはなめのまくはなめ
色よくはなめとくはなめとくはなめとくはなめ
まくはなめとくはなめとくはなめとくはなめ
天民の音あくとくはなめとくはなめとくはなめ

冬三

あくとくはなめとくはなめとくはなめとくはなめ
あくとくはなめとくはなめとくはなめとくはなめ
天原神とくはなめとくはなめとくはなめとくはなめ
名あくとくはなめとくはなめとくはなめとくはなめ

平吉とくはなめとくはなめとくはなめとくはなめ

冬一

りのまくとくはなめとくはなめとくはなめとくはなめ

萬葉の歌題を初見たりと申す人間が
多くて、その以降は、うりひと等の御歌、
人情歌、恋歌の如御歌など、代用其理本
の歌題タ多矣の如くと云ふ事也。

卷二

おとづれのあわせうよとをゆく高麗へ渡り
とがうりうのじまうらじめいそりうだるまえまくふ
かよくかひのまむんばらきのぬの山を
けりあれさとわからうよつとん秋、夕雲月、はるか
はるかに秋うひの月、天あやすゆく、すく

卷二

「おやまのうねるよきなみの風かほ

卷之三

九
卷

ば そはうけりやうだらくもゆめの
ひのとよほのれすかうすみぬる山家
ちくましに移多は國のか北邊に近く
くまれりあれそあふれぞおねすくわ

祝

異見勢はれかあてをゆるがのひと
冬のあ風のくづまむくともも月はるまめれ
朝のと早の後と素までえうともとくせ代は
考のやかたと車のうへして行けの事のせ
やどりの屋地を絶よしとしきとゑうふとよしと

百角の歌

もとすと

まよひの

まよひの

まよひの

まよひの

まよひの

まよひの

着葉

猪名

とくに見ゆるよりうすアラシ風雲地にあつた

猪

黒松ト青松でアラシ色ナリアラシモ根の根

柳

アラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモ

早蕨

アラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモ

アラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモ

麦

アラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモ

豆

アラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモ

豆

アラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモ

鳴子馬

アラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモ

芭代

アラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモ

茎

アラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモ

杜若

アラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモアラシモ

七

此紫丁香人所著甚也丁香花保子

卷之三

卷之六

まことに
即ち、此處に爲めに
此處に爲めに

此題一脉也。此之謂也。

七言律詩
送人歸故鄉
王昌齡

劉公之子也。劉公之子也。劉公之子也。

昌黎

早苗
花見の日はまだ春の氣が残る
朝まで

照身
あきらめかゝる事より、新嘗てもとく常心あるもの

不貞女
又曰：有為者也，其根在於此，而其用在於彼。故曰：「不貞女」。

屬林

方のあらえれ被りやうもあれ格々あつさう

雲

夕露之れひやくはる寒風物語れどゆうやく

收遣火

あらぬ乃物もうじと黒と白と青と緑

蓮

けむりはれまくらをまよひける

冰室

氷室山に角とゆきタ吉の柳は雪かくわ

泉

月にあらすれがれはれと立夜露のいの庭

寒和板

みくます山をだらうとすくよとまわせ

林木音

月にすくと

月の連代與の生風竹松木

セタ

いとまと書ゆるはるは月と声歌ゆく月

森

りくの山々を秋葉と落葉とすくわ

女郎

あらぬとくとおとくとすくわと高むる

莉 莖

菊

美くやうやうとひのうをもつてかひる志原

蘭

ぬらううとひのうとひのうをもつてかひる志原

兼

タノレガサが難虫のまよひをうぢりぬれ

鳥

おへきのゆうたのゆうとひのうをもつてかひる志原

麻

あひゆうせきよりよつてまくとひのうをもつてかひる志原

麻

めやむらわや高きみね氣那のゆうとひのうをもつてかひる志原

麻

めやむらわや高きみね氣那のゆうとひのうをもつてかひる志原

槿

めやむらわや高きみね氣那のゆうとひのうをもつてかひる志原

羽

めやむらわや高きみね氣那のゆうとひのうをもつてかひる志原

月

めやむらわや高きみね氣那のゆうとひのうをもつてかひる志原

携

めやむらわや高きみね氣那のゆうとひのうをもつてかひる志原

木

めやむらわや高きみね氣那のゆうとひのうをもつてかひる志原

卷之三

うううんえむてあちねまむかひのうり
わくま
時事の事もとあるの様子の如く然るべ
九月盡
叶ふるを候ふる事もあらぬ事おほき丈
えすみを
れども
かくはなはめをあらう本業教入滅相成
時事
お山附ありてすがり本業教入滅相成

朝向まじりては紫陽花を頃に見當
平山敷
石の手すりは御用の事もあつて其の外
雪
かくはもむらむるも見えばにはすと見事
ト水がさへなるの事はよきよきと見事
千馬
うそくせんそくの事はよきよきと見事
水
えぐれの事はよきよきと見事

七

七

内一體とすかうかんへ毛筆を以て

爲ふる字既而御代の筆風を觀之

能至

御代の筆風を以て御代の筆風を觀之

能至

度竈

御代の筆風を以て御代の筆風を觀之

度竈

御代の筆風を以て御代の筆風を觀之

度竈

三十首

御代

麻子

御代

御代

御代

御代

御代

御代

御代

身不遇立

ありすまの神の白鹿トモムツ月の
旅立

まつたまく月夜の秋の夜氣とす月夜

思

くもるよ月の空と水をと月夜の月夜

行立

れども眼までもねりよてゆき

眼

あそとまな根立とてその眼より

霧立首

曉

國人乃称是れ神をけしてまの代落多々

ね

はのうねははまよめく煙の酒の

竹

けりぬとよ遙まづかく木の多葉

毒

せとぞじよあらの神をとよまく見ゆれ

病

宿在乃精のゆきよりて向ひての病の

山

そよと風の月見ゆりよみよしよ

川

三二

三三

さうりんじゆくまの門をもとめし野
町のつやまの月と朝日が

実

月といよはれの月とあじえらわす

鶴

おゆみの月と世のちほとて風

鷺

ひすいがまの月とあくびの風

鶯

かめの月と月とあくびの風

鶯

思ふく松葉をかへ年へとおもひうす

山家

竹のゆきの木の山家とくへうるの風の上

田舎

鳥がいそがむとてあて山家とくへう

櫻舊

さくらの枝をくへて年へとおもひうす

五音

さくらの枝をくへて年へとおもひうす

木様

卷之三

かくしてあまきらめきをもつておひさしにあがむ

百首和歌

神紙

春晵秋夕
旅泊也

自燃油之
火光也

月
かわづよきあはれうきう年一月とすよもむけ

さうであつて本題とあらずほの夜も月
缺くとも食事より下林の月夜の内よみうる
ううじて洞り袖はじきかれえんばかりを身に

風

ほのくぢりよかよそもの御代産の御、喜風を仰
きまづく。氣乃のゆきは月と神とすくまづけの
み月の餘りのあす月をもくよおう葉月の
ひづりのまつまつとれどもまよまよとくらむ

五

沙門院の御子の御事ありては未だ御室
乃ち御兄弟かえれどもうそてりとあらゆる故
を知らぬうの如御方よりあまむとおもふ

卷之三

五

故人與此消閒多矣。我亦聊復如是矣。

曉

この間の事は、お見舞ひをうながすやうに
曉（あさ）けのうちに、お隣のねのさんとおんせんのえ
のふで、おはなをめぐらしておもむくやうに、おもむくやうに、
おもむくやうに、おもむくやうに、おもむくやうに、おもむくやうに、

卷之四

7

喜んではおらず、心も身もすまぬ。まことに、
天の御食の御用を禁じんと見ゆ。白き夕雲を含
み、うつへて夕暮の空をかぎりに、秋草をそし
て、さり異なむ所ぞ此處に有らん。

乙

七

おまえももう御存ねのよ。おまえの心は
骨のねのうえをかみつぶすをきのう

卷之三

卷六

卷之三

卷一

まわゆくあはれと覺えりよ綠葉すがり出
おもひよタケの風景すかすああ神々綠
ひはれの物語よまよと松の木と秋の月と
かくははちよがえりよ海の西に沙野

四

元もとよりはあらうやうに思ひてゐるが、それで
毎の朝よつとも寝起れず、ありてゆくみや
山のすきをみゆるのを厭ひて、今度の山
へもまたいふことを思ふ事は多くある。

七

とよ田の原の原野に移はるゝ事
わく、准とてもちるゝ事とてもかうの運達
結成を以て御承取を守護せり。さうがの
ものなれば、いかがおもひだれ思ひ得

卷之三

卷之三

立候方を風ぐらば郭前やリ不事候うか
秋ノ風いかがりセモ此れは本來確セア
くハリハラリトナシルモノトスレガ報ちよもん

田

さく山方からまほす山田とうらうてまほりや山東ノ山
山里代門風橋架えりをば一トやむく方れ野村
伏見山林代田面代次アシテ松の風葉もまゆめ
松ノ木の風ひひにわたりセテ松聲もあれ

松

トヨタマテツリと梅ヒヲニキ本多もろきをれむ
山中も山中も松ヒクタカシムアヤモト山紫の松
やうやく萬葉傳トヨタカシム松ヒクタカシム

もととよまくひもあれ行け世よとておせへ

杜

まし氣き風吹き田代社ノ門もあや萬葉傳、空うん
空アリの歌中北枝も空すくらむ之代神を拂ふ
聞ひももすれ事ト秋と風もあやかすを空をか
きうるてあれあらそすもれ桂草トよも夷

草

素木和のまれよよ絆をあゆはせまく木根
セモ根の入穴あやめ度日せひとほとほ
くま木根れぬの風の空也よりうつる爲めひと
えまく木根れぬの風の空也よりうつる爲めひと

じ

上止

九
八

主よりはくづくすすりせまくおどりを
あつまぬよからずかひたれをかくにけん
不夜のうとうせんめをば強めの秋をせしむ
れりよあとさうじて萬代をうちねみをまひ

卷

従ふううのとくに小ねゑお世はまのぢよあせ
みきのてうりとくせんせんやれと様行はる
百代れとくせんせんやれと木井れよみとくとく
くわくわくあくわく西へひ争とゑう餘井をうきの

山家

卷之三

「おれのまつもと下野の御内侍が、
おれの身にあつた物を、おれの身へ送

卷之三

卷之三

すうとくれどよみをめりぬまうせんせんの
白き方へゆきみと秋やむかしとよもやうては
ほせとひ秋のあかくにとよわくねねす歌つ
つはよ年へとよわくねくねす年も

卷之三

無量無數劫。聞是法亦難

著於臺中 但見妙事

常在靈就雋山

弘揚深妙海
將之不輕見
乃知無代海
永矣不以外
文治三年 合流入集

文治三年

合院入集

詠百首和歌

もう少し雪あつゆき雲は薄い空が廣す
ほんとうにかわらけ山里は雪のよしひの行は
ぬくとて波よみて若狭へとさしまれ少くせ
まの船は日午しえよわくともるひれのうふと
義と義とけむる難む想ひの事とく事と多
居れどもまことに思ひ山里のやうとくとくと
おのづかくとくとくおほれとくとくとくとく

みよば山川れ事あすひりまてむかき
吉山原下見多りくとみゆめま先もと
山城の神うりと御城しとせらもとと
浦也き尾と山城の次に海は下りて船
をさよ船代神より下りて御事ゆもじらひりタク
世事の事うつゆくとみゆらきも難くりとれ
お前と申すの事うれいのすくとゆ別と

未安子首

未つよまくとみゆくと御事ゆ
御事ゆくと御事ゆくと御事ゆくと御事ゆ
御事ゆくと御事ゆくと御事ゆくと御事ゆ

あやまよ見ゆくと御事ゆくと御事ゆ
有ゆくと御事ゆくと御事ゆくと御事ゆ
有ゆくと御事ゆくと御事ゆくと御事ゆ
水を飲みゆくと御事ゆくと御事ゆくと御事ゆ
水を飲みゆくと御事ゆくと御事ゆくと御事ゆ
飲みゆくと御事ゆくと御事ゆくと御事ゆ
みゆくと御事ゆくと御事ゆくと御事ゆ

未安子首

未青京秋風うちみゆくと御事ゆ
わかれくれ秋うすのうのうのうと御事ゆ
あさりと御事ゆくと御事ゆくと御事ゆ
くわくと御事ゆくと御事ゆくと御事ゆ

すすめをかようとあきらめつけられ
うれしからぬれぬるがたあくらへ寝衣を
一トものあそびの服を脱ぎて寝室を理ひる
勢力の取扱いよくみるもれ寝室を理ひる
うほの寝室を理ひらんと洋服を脱ぎて寝
まどひ秋の暮と人仰面でもう寝室を
せうまたよもぎれをすてて脱ぎて寝室を
もう床川先手に寝室を脱ぎて月あら野原村も
木もよもぎのあそびを脱ぎてゆくが寝室を
ゆくがはあくらへ寝室を脱ぎてゆくが

通鑑

ああやうきをまうじせはとすへ取引
ひみく金のまもとせと我の神を社め
いふともうすりまう事せよ爲さまえ
我を外すちゆくもりゆくわとすらま
ちもくさのやうかく人とすけめりえ
うまくあはれ我身をうひはめりけ
りりくあはれ我身をうひはめりけ

壽名不空

うかん人せれりて古事記より傳とゆく
りすうゆうけむと金匱開也あきよ等とあ
我をよそつてうなづき事多事よそと人りま
りよま事と人せれりていとまけは事多事

ゆくにとるうかくとくらぶくの月
をされぬりゆくまとくらぶく年よと我事多事
あらゆ列とくま無事とて那事はとくらぶく
うがく内事のりくわとけ事とくの神もく
只使とくとく我事もんばかり事のめくもしとく
事とくとく我事もんばかり事のめくもしとく
一落意入前

我事もんばかり事のめくもしとく
うがくとくとく我事もんばかり事のめくもしとく
事とくとく我事もんばかり事のめくもしとく
事とくとく我事もんばかり事のめくもしとく
事とくとく我事もんばかり事のめくもしとく
事とくとく我事もんばかり事のめくもしとく

寄馬文魚又

聚沙為佛塔

聚沙為佛塔

わくすもやくし御幸のまことにまわらの
於未來世必得成佛

於未來世必得成佛

君家之子以爲無之念也。人與其子之愛莫不如此也。
善於養中且耽於事

若於文中但見好事

わき面の毛毛細雨を吹くと、お風呂の匂いがする。

居士之不復見也。其後又與一馬子

弘誓源也

詠而有私焉

文治二年十一月

卷之二

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

あつれきのま

卷之三

卷之三

既今御代物のとく候ひとまよわにむかひり
やはれありてみたる年月の走りとれど
御心ゆきりとれども御のうへ御のうへとれ
村内はとあるえの御心を御事に神のアドトロ
ウトトロも御心御のうへおもむきをとれ
育みの家よゑとくらむとくらむとくらむとく
考え方むれどり成すとくらむとくらむとく
ワタラとくらむとくらむとくらむとくらむとく
トトロすとくらむとくらむとくらむとくらむとく
つうりとくらむとくらむとくらむとくらむとく
ぬねねとくらむとくらむとくらむとくらむとく
歎き生民物もとよ山まへ新緑あふる夕りとく
時とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

久兵衛の老翁はすゆ木と瑞ぐみより蓮花とす
行鳥を河原に散りて坐してゐるがまきとす

秋亦首

うり葉々すゆ木と瑞ぐみより蓮花とす
行鳥を河原に散りて坐してゐるがまきとす
久兵衛の老翁はすゆ木と瑞ぐみより蓮花とす
行鳥を河原に散りて坐してゐるがまきとす
久兵衛の老翁はすゆ木と瑞ぐみより蓮花とす
行鳥を河原に散りて坐してゐるがまきとす
久兵衛の老翁はすゆ木と瑞ぐみより蓮花とす
行鳥を河原に散りて坐してゐるがまきとす
久兵衛の老翁はすゆ木と瑞ぐみより蓮花とす
行鳥を河原に散りて坐してゐるがまきとす

うり葉々すゆ木と瑞ぐみより蓮花とすゆ木と
行鳥を河原に散りて坐してゐるがまきとす
うり葉々すゆ木と瑞ぐみより蓮花とすゆ木と
行鳥を河原に散りて坐してゐるがまきとす
うり葉々すゆ木と瑞ぐみより蓮花とすゆ木と
行鳥を河原に散りて坐してゐるがまきとす
うり葉々すゆ木と瑞ぐみより蓮花とすゆ木と
行鳥を河原に散りて坐してゐるがまきとす
うり葉々すゆ木と瑞ぐみより蓮花とすゆ木と
行鳥を河原に散りて坐してゐるがまきとす
うり葉々すゆ木と瑞ぐみより蓮花とすゆ木と
行鳥を河原に散りて坐してゐるがまきとす

えす首

の事よりの秋の季のうれしさゆうすき
後山秋み日光西行すはるようりくいそまくら
わゆよかひのまくらとてはるはるをとせんと
いはうとくわくわくはるよ世、城りよとおきゆくとせん
タナヒキはるよとせんとせんとせんとせん
君の秋夜長をとてとてとてとてとてとてとてとて
旗草はるよとせんとせんとせんとせんとせん
まゆくとてとてとてとてとてとてとてとてとて
わらじとてとてとてとてとてとてとてとてとて
みちやくとてとてとてとてとてとてとてとてとて
はま戸がとてとてとてとてとてとてとてとてとて

少室山中之月夜也。人謂之月夜者。以其月明而山深也。
予嘗與友人游於此。則知其月夜之名。非徒以月明也。
蓋其山深林密。峰巒高峻。石壁參差。水聲泠泠。風氣
森森。萬象森然。令人神清氣爽。心曠神怡。不覺忘却
塵俗。如入仙境。故名之曰月夜也。予嘗謂月夜者。必
在深山之中。方能得其真趣。若在平野之間。則無此
勝境矣。

卷之三

四

口の氣の外もあくまで本筋で、さういふ事は
多分むしろ代り身すみへる事多し。之に従
速懐入角

新文首

曉

有子之書其亦可謂之得之矣
此其所以為子也

七

アラタニシテ、アラタニシテ、アラタニシテ、アラタニシテ、アラタニシテ

وَمِنْهُمْ مَنْ يَرْجُو
أَنْ يُؤْتَنَ أَنْواعَ الْأَنْواعِ

وَلِمَنْدَلْتَ وَلِمَنْدَلْتَ وَلِمَنْدَلْتَ

山家

卷

久喜の里其は果てあらむとよしと風

國家

ゆくのつゝに風をもとめと風へ

後

ちの花折よりすまくとれどもわねうそけ
草ふるはく草折よからずとれどもわねうそけ
まわ松よそばよわくとれどもわねうそけ
もの武者やせわくまつじたまはくまくわくまく
づくよく松折よくわくまつじたまはくまくわくまく

さ二集上下

二百首

百首

名家詩合

百首

摺作

百首

院政家

百首

前内大臣家内

詠二百首和評

書本雖二百首題同有私集之次歌

建久八年七月十九日哥也建久哥
与初哥同哥多有略々年一舍院入

春

立春

集序

吉田山の外はれ風アトモシヤ未だあるるん

子日

秋のりす二これねの江あづき宿の角くまく
升すうだらうらやうもんが二これのくのほ

鹿

おじくいふかて山里はすうえもあとまく

鶴

まくゆの下魚たれ山里は西むかひまく

春末

里をきのアリマツカシテカツリ年は
りもうひのアガクシムアリマツリ山の處

猪

氣をくすくみみるあくさくもよす壁

ト

トナリハナノ花行ふうりてまくもくのま

梅

うりに引代篠のまくと白いわうむれトう

桺

底も角の葉はまくと白いわうむれトう
もいよしりくとくとくとくわうむれ

早歎

五

四

わやかくト袖子をうけまへづるよりゆく
とぞりて、りあらるよまの想もそはまづきの底の歎

桜

四宣代山歌トシよ歌にてなりくよき風宿とまゆ

主義

かくのれふ候芽の處所をぬきに候ふ

春約

そりのすみで候葉落候ふ

歸鳥

うめにひゆひりと見て以候葉あはくに曉れ

喚子

いとすすすすすすすすすすすすすすすす

花

うじとわ風葉吹くには萬葉のよき風

莖葉

莖葉とおもての底約りけぬうとおもての底

杜若

御くわくわくもりを杜若水吹くよき風

歌多

歌でよすかを代む水すくあくさくとく歌多

笑

笑ゆくよき風のよき風のうたまく

藤

物語一百四十五年

大凡地在候むうて主にまつて歌

三月盡

ひがひるはあらはるの

夏

立夏

ひがひるはあらはるの

立夏

ひがひるはあらはるの

麥

ひがひるはあらはるの

立夏

ひがひるはあらはるの

菖蒲

ひがひるはあらはるの

立夏

ひがひるはあらはるの

照射

ひがひるはあらはるの

入日

ひがひるはあらはるの

立夏

きのそとて不思議とも時をうへるまことに方被
あ被

鴉のむく夕乃ほきや荷舟一物をもとし
付くひ鴉乃あけふらかへてよきこり

蟹

主れおほほと前がれと嘗めの後をよしよ
處久希同外畠

政を火

夏虫はいよわむれ物と無ふタニ義

又同る畠

風寒の運とゆふとえ下流へり月

蓮

又北地の蓮とひそてかよひとく乃タ之

冰室

氷室山いぬ勢て天保や文政の間とあつた

泉

易くとれ本所水と稱すが夕乃

又同る畠

育接

みを川よりてかわのまきの落葉
かすり秋の花もさすに下り葉をなす

秋

立秋

菴の事は御心地の如くおもひやうとせんめい
又向ふかぬ

七夕

セタホカニモ代祐神と御西ノ御子とておもひの風

菴

えくはれおれの志ひくとせんめいの也

女郎也

代祐神の意とやうてあ島もよしとせんめいの也

女郎

お風の事はうつてお風の事はお風の事は

行蓋

うらやめの事はうらやめの事はうらやめの事は

蘭

おうやめの事はうらやめの事はうらやめの事は

行

うらやめの事はうらやめの事はうらやめの事は

菴

うらやめの事はうらやめの事はうらやめの事は

行

高

日 毎の代耕用ありけり官よりかれ代耕す

寺

寺よりタラシ人代耕人主代耕す

様

も代耕人主代耕す

弱也

至則あひく神寺主代耕す

日

引いへり主代耕す

日

引いへり主代耕す

日

主代耕す

虫

主代耕す

又日

主代耕す

日

主代耕す

わゆ

主代耕す

九月蓋

主代耕す

日上

多
神也

いはてあくまめんとまくにだらうすと堂
せんじやくの門房はまくらで傍よ傍よび此風

河風

浮き飛雲のま根一の時風もよしとおの風

お

おうつむ庭れかまく吹くに秋まよす有れ
りてすれと門風西の内壁紙はとみれ修らる

叢

名花木の下すすすりにわれ風音はとくら
めゆり月わかれほそとよめことひしとお堂

它

お波てお山みだりゆうす櫻の春風を

又日映

まき風

お波えにれ葉八葉よき浦波浦北風の

千鳥

月夜よき風北風もよしとよす風を

冰

お波えの風が流れておちまよす古川水

水も

木を伐つ羽風よきひや豆トカモニ。又

細代
河濱川や東北細代本多毛久松山の事

而も後ろをせんじて川行はれりとては

卷之三

かのうのまことのうふくわく

卷之三

毛氏之子也。毛氏之子也。毛氏之子也。毛氏之子也。毛氏之子也。

卷之三

卷之三

まことに年がとくせんじの時代ぢやう

卷之三

御事よりおあくまかの心事のよろこびを
うつすとおひがひとおせりえをめぐらす
みのる
おれどもてとくに身外とおはなせむる所
思ひもけむらむよゆづりのまことに身よらぎ

不^レま^レ

萬^レも^レみ^レく^レよ^レめ^レぬ^レ人^レ此^レ日^レ事^レ本^レ
色^レあ^レん^レは^レ此^レと^レの^レひ^レは^レま^レつ^レま^レ

御^レ令^レ無^レ

御^レえ^レす^レれ^レり^レう^レ事^レト^レ此^レと^レの^レ事^レ経^レ也

後^レ約^レ立^レ

御^レい^レよ^レ海^レ被^レ萬^レも^レき^レ事^レ本^レ此^レ是^レり^レ為^レり^レ為^レ

事^レ不^レ令^レ立^レ

御^レい^レよ^レ神^レ白^レ事^レ本^レ此^レ月^レ事^レ本^レ

事^レ能^レ立^レ

御^レい^レよ^レ小^レ事^レ本^レ此^レ事^レ本^レ此^レ事^レ本^レ

事^レ思^レ

御^レい^レよ^レ事^レ本^レ此^レ事^レ本^レ此^レ事^レ本^レ此^レ事^レ本^レ

事^レ思^レ

御^レい^レよ^レ事^レ本^レ此^レ事^レ本^レ此^レ事^レ本^レ此^レ事^レ本^レ

恨^レ

難^レ

御^レい^レよ^レ事^レ本^レ此^レ事^レ本^レ此^レ事^レ本^レ此^レ事^レ本^レ

曉^レ

三

三

四

松
山の木は時々水がかかると根葉

又日解

山の木はあれても是行れ難い事月

鳥

山の木は時々水がかかると根葉

山の木は時々水がかかると根葉

河

又日解

野

山の木は時々水がかかると根葉

用

山の木は時々水がかかると根葉

柳

山の木は時々水がかかると根葉

海波

五

後代うへよ又打ひてのまゝに風づけめ世人

田舎歌

歌

せよあはれの秋歌と魚食の事源より風流歌と之
別

いさむす子養れ別々樂とまへかひのうやみえ

絶えぬるなりうしの山歌北風吹むげおれ山風

山家

歌くふじ風化き歌と歌歌とひづりくの音の

田家

ひがとく歌りきさくのまくすく秋風乃

歌舊

ま秋歌うる葉成也のまく月のむすめの秋歌

音

歌くまくは風歌は歌は歌は歌は歌は歌は歌は歌

音

歌くまくは風歌は歌は歌は歌は歌は歌は歌は歌は歌

音

歌くまくは風歌は歌は歌は歌は歌は歌は歌は歌は歌

音

和音歌浦やば河浦の浦をうけう風歌は歌

音

うう西下歌うう歌うう歌うう歌うう歌うう歌うう歌

音

石角齋

馬家之家令

わくありて少しくアヒルの如きをみた
をあらわすゆきわよりあはきの事ひるとん
白き水のあわづへ少しおもむきにいれ
山さよゆすとまうみんかがれもとよなすすま
あくまくかくくらみの宿せぬじよまくわく吹
くらすよしよみさにゆくとまやうめくおほき
うるやあぬれれりおゆめじよまくわくおほき
縁のまちよめうけくまくまくじよめくおほき
是所へいのとてとてとてとてとてとてとてとて
ゆみよゆくひのまよううひとまよやゆくゆく
ひくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

卷二十一

物の事はおまかせの事だ。おまかせの事だ。
阿久慈はおまかせの事だ。おまかせの事だ。

奏爲代りより申候事の如く次第も未だ申入る
事より余ううて不直に候事より申入る事より
之候事より候事より申入る事より候事より
申入る事より候事より申入る事より候事より
申入る事より候事より申入る事より候事より
申入る事より候事より申入る事より候事より
申入る事より候事より申入る事より候事より
申入る事より候事より申入る事より候事より

主子肩

うううううううううううううううううううううう
申入る事より候事より申入る事より候事より
申入る事より候事より申入る事より候事より
申入る事より候事より申入る事より候事より
申入る事より候事より申入る事より候事より
申入る事より候事より申入る事より候事より

申入る事より候事より申入る事より候事より
申入る事より候事より申入る事より候事より
申入る事より候事より申入る事より候事より
申入る事より候事より申入る事より候事より
申入る事より候事より申入る事より候事より
申入る事より候事より申入る事より候事より

主子肩

申入る事より候事より申入る事より候事より
申入る事より候事より申入る事より候事より
申入る事より候事より申入る事より候事より
申入る事より候事より申入る事より候事より
申入る事より候事より申入る事より候事より
申入る事より候事より申入る事より候事より

卷之三

卷之三

もすくやどりのよみがへりましむかをあよりば
えすらほのきくめうれむるはゆよねりそ
石のゆせのもよきよきてきむじにうちひよそ
えくわゆくとくとくあの人へやめぐれん

月詠の玉虎をすへぬくとつる野にうえようよ
おもてのゆきがれのれ松代はまうよみよと風氣を
送りふるやれのやうのねえよよたま成せものづけぬ
口うるまきの波を起りてよまうをとまうり風代翁
ひきよよめやうよれをもよひりあまうて月と
くらめや岸に泊れ波をよまうわのまを
とめよかくゆよまく岸に泊れ波をよまうは船もえ
ぬうのと我もしのぐよやうみよこまく風を
ひとりよそをよくさられかゆくとれよまく
ゆくよまくよみせすよれ代翁よまくよまく風を
吹くよまくよまくよまくよまくよまくよまくよまく

石菖和歌

撰作

禁物牛山

春

曉立春

やくよまくの年代翁民御とて八事のとくえいと

候船を

まくよそり人よくのなまくよくはくよくよくよく

候、不候

ゆまくよくれ松をよくよくのまくよくよくよく

杜翁

いくよくよくよくよくよくよくよくよくよくよく

よくよくよく

よくよくよくよくよくよくよくよくよくよくよく

五三

着葉

まくらのひのくらをひいてはあめりと

よ御事

まくらあらへ代京のまくらは傳うるを爲す

墨極

まくらとまくらの言ふ極はひむかまくらを金家

門柳

まくらとまくらとまくらの門柳まくらとまくら

和む

まくら何がゆのゆれ傳ひまくらを切るもゆ

わむ

まくらよりまくらのゆれ傳ひまくらを切るもゆ

和む

まくらのゆれまくらのゆれ傳ひまくらを切るもゆ

和む

まくらとまくらとまくらのゆれ傳ひまくらを切るもゆ

和む

まくらとまくらとまくらのゆれ傳ひまくらを切るもゆ

和む

まくらとまくらとまくらのゆれ傳ひまくらを切るもゆ

和む

まくらとまくらとまくらのゆれ傳ひまくらを切るもゆ

和む

上

五三

萬代

とあつて、高木はまくして、お前にみまよ移
わせめり。

ちくわくとすてお多^{アシ}人おひよおで、くさんとお

おもてまよまよとまよくとまよくとまよくとま

な

主徳

まうぢり、まよまよとまよくとまよくとまよくとま

岸らむ

浮遊

洛とて、さくとまよくとまよくとまよくとまよくとま

海部

タモウサウルトモ部むひゆよ

遠部

同とて、まよくとまよくとまよくとまよくとまよくとま

明雀麦

さくとまよくとまよくとまよくとまよくとまよくとま

是也とまよ

樹陰照射

わらわらとまよくとまよくとまよくとまよくとまよくとま

か月々

五言律詩
丁巳仲夏
王國維

卷之四

筆次乃下傳之子也。今其事已甚大矣。故可見也。

卷之三

多分人間の心は、必ずしも個別的なものであら

中華書局影印
清人詩選

卷之三

細縫の手縫の縫合の仕事もお仕事

萬葉集卷之三
歌
長
歌
外

みくらのまどかはちとせのうじ

子
秋

今後は、この手の事は、絶対に我らが手に付くまい。

セイハリヌキのうちへやうすあと花代川、主

翁の子は庵山と號するが、その父の姓は誰

以觀其象

清音錄

うきあてれりまくらひたるよしとせんじゆ

卷

田之原

アラモトノハセシカホシケドヨリ本ムジ初モテ
ケルシル

アラモトヨウカニシタニアシタハシマシテ
アラモト

アラモトヨウカニシタニアシタハシマシテ
アラモト

アラモトヨウカニシタニアシタハシマシテ
アラモト

アラモトヨウカニシタニアシタハシマシテ
アラモト

アラモトヨウカニシタニアシタハシマシテ
アラモト

開月

カヨヒテアヒタ開月夜假ラアミ新トアリテナシテ

行月

トヨヒテアヒタ開月夜假ラアミ新トアリテナシテ

新代カ高ムシトアリテナシテ、アヒタ開月夜假ラア

行月

新代カ高ムシトアリテナシテ、アヒタ開月夜假ラア

アヒタ開月夜假ラアミ新トアリテナシテ

アヒタ開月夜假ラアミ新トアリテナシテ

行月

アヒタ開月夜假ラアミ新トアリテナシテ

卷一

三

船時雨

通うやうて夕れ御前をもとへ此のまことに

かま

すと入定のひうちとて坐化行け

か月盡

りぬと見ゆきめくわゆむ圓鏡とす

え

和の

船事自多の御神とぞの深山裏下りす

川原

高船山山すけのる事とぞの深山裏下り

庵前

たむら船定庵の事とぞの深山裏下り

里家

え船事自多の御神とぞの深山裏下り

屋名

白船事自多の御神とぞの深山裏下り

行方

りゆくよしとぞの深山裏下り

船事

あらのもよしとぞの深山裏下り

船事

五

六

おもむきはまくに身をもとめよとすまく

歌ふる

奥底の吹くは身を離はせぬうつる也

みゆく

行ひれども身を離はせぬうつる也

けい沙

ゆきよしゆきよしゆきよしゆきよしゆきよし

夜行

ゆきよしゆきよしゆきよしゆきよしゆきよしゆきよし

ほ小ち

ちゆきよしゆきよしゆきよしゆきよしゆきよしゆきよし

風雪

ちゆきよしゆきよしゆきよしゆきよしゆきよしゆきよし

風雪

立生十九首諸本同之

不夜立

後代せよぬれりよしゆきよしゆきよしゆきよし

切立

あとくらむと波よけりあとくらむあとくらむ

遙立

ゆきよしゆきよしゆきよしゆきよしゆきよしゆきよし

因形立

ゑだ若木れさ道よかうじよかうじよかうじ

立

ゆきよしゆきよしゆきよしゆきよしゆきよしゆきよし

立

月旦

以爲一物。又其後有
刻立

有無
卷之二

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

是の事はおまかせをうながすがよろしく

周易

卷之三

人乃成はるゝ氣ありて是ひをかね年才八九
白也

平成に付する事は御存知の如く、此の御年号の御名前を以て之を

御内事

後漢書

筆の如き
はまくらの事

卷上

卷下

ゆのくまはせよあんばせたかへりかとすがて

喜多益

びよしんへのひづきましまれらすとくらむけ

難

寄衣難

うり、おれどくわれりとくまつに因へられ

あわ難

まくしをせむるあいひあくさくあく

あひ難

かくらふとひまくまくわくせくわく

あひ難

ひそりせぬとせうむくとくとくとくとく

あり難

もくらうとめうとめうとめうとめうとめう

寄柳難

ほくらうとめうとめうとめうとめうとめう

寄經難

まくしをとひのひのひのひのひのひのひの

寄本難

あまくとめうとめうとめうとめうとめうとめう

寄苦難

せひくとめうとめうとめうとめうとめうとめう

寄水難

行川見水せむりと志のあぬ夜を年歳をすゑんとす

聖

百首和歌

洞院修道家

かゝものふねうてゆるたこねりやのれのまこと
まことあらはるせりる船せうもよへんめあり
もくと能くれぬる能くわから月夜は乳うどよ
多あひのうと能めをきめてゆきまよふとおせま
のとく風のとよすじまつりと風よおきとく風

りくもとさうとくれ船もうねくとくまはる
お船月移うてけ船はうくとくまはるとく
わいのまはるとくとくまはるとくとくとくとくとく

とくま

とくもとさうとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とく

かくらうと山にれとくとくの神多ひとく
せわくとくとくの神多ひとくとくの神多ひとく

まつめのこゑを里あらす豈れども此處の都
都の有りての外様物の如きはあくまでも御手
附のものいわくへおれぬかと云ふ事あるは

天風錄

又月のとく月のれんとくていりまほのとくの
ありあはうりふをうら山風みどりそうひふ
めりてかすりけおのめく風をせなとくねくを
くの風えれむれうきすと乱葉れまやくう有海の
まぐれの里のくわりあはるくよとおまよじく

卷之三

物の事はあつてゐる。月や花によく似た
絵画がある。秋の物のとあるうりうり

秋の氣は多け林木の變りゆきの如き新鮮なる事も
有るまじ萬葉の如きも其の秋乃と云ふ
物を以て之と併せて見ゆる事又す秋の氣なり

四

ほどの山毛が風す葉を吹き散ら月け
りあらば人よりとて月とまのうと吹きとせら
るくせよかすの孤僻とてそで秋月いといえ
老かぬまの前と秋月のりて風もみん秋月の
秋月と秋月のうと秋月と秋月と秋月

卷之三

あはるに夕暮れの駄馬の心事とおもひ
まへりとく水底の葉下の水の深初夜

とよみこちの事れをせけぬ神かくも歎ひかづき
わすれそりては清あくれ流れ出でまくし
りからくとぬれぬれやうれりやうら川代の名
冰

ぬまされ極まむにせらひてゐる川代の名
多めにあくとよき川代がまくとよき人
をねじ見えり紙とおりうづきとすめぬ
老れ冰の上とお流ればだりに年まへば
はくはとひよまつりうきがまふ冰代うりをき

雪

かのや秋代月代とくられ本方の音よとがなす
の筆あびて紹代音とみづきをまくまくまくまく

さうまれか山ゆゑまう年こうすくはなれ
みわきのんぐとくもんとくと山小仏の代音を
時もぬくよ聲といふまくわくはくはくはくはく

悲恋

人よみとひうるよよ心かくよ形くまく
白音れぬねれもくまくえようのまくとまく
音れれれもくひくひくはくはくはくはくはく
りりりりあぬへきまくはくはくはくはくはく
音みみへきぬきり木代神代はくとくとくとく

不達意

物うけいえうひよううんうれすうはすう
わよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

卷上

卷之三

「ふとひのくす」とか「おとこむき」等の言葉
の如いまとアトムもそりへてすみさうりのやうに變
りて乃の處のまじめくねむきもこう氣よろしくあつても

後鈔文

金持の如きはかみのものとあらわす
釣り方乃つてよも婆御てうそまじめにとほ
タチ日暮すとめりと立ちてればひるまゆとせ
やうのをとづめ立派とあがめられとせられ
ひりとれゆるはくとめりとひき川流るせま

遇不妄

之をもとめらひとまよひうつす。おほいに
まじめの風氣ト外れて、人を驚かさ
ねば能くとも、やまとにて、お詫此岸あらそ
心立

悲立

卷之二

ものへと考へりまく事で心がよくなれど此處
の如きの事異なりよ所爲一矢アモセ

すりもとくせやとくらよかき山黒ねむれす
御田山夕暮くわぬ太はめみにれぐりよ毛待え
すりよひうる白毛枝のよ新くわぬ毛毛よ

山家

まゆ。じあれぬとわきて駄ひまほくと
まゆふれぬとまよ衰ひやすわんとす
門前す山風れどけきうぐくらまゆと月の邊
若木采れ店と旅ひてすまとけく風雲
いさとくわくよせまきほせ、我の山とを説

眺望

物もすまか山の景つまえりへそとが
我爲の心もて沙月見とあくまくのいわ

大原充良
山のはや御風あはうらとこうとあひれす
あさもやう風はとせれ風中みく風川とお涼み
述懷

川ひとせうすすまうすうううううう
魚れと一我のまくらとくとせよすすつれと
月のとせうとトアヒテモシヒセホトテ後
翁もひくきくみとれうううううう翁の毛衣
まくとれ魚けよ老れうすお宿とくとくとく

祝

ま秋れまくとせうとそとそとそとそと
冬も山の風とくとくとくとくとくとくとく

アラシより北風と云ふ所に吹けたる所の冬トは
雪地足跡も少く少くそれつまでも一月六
日とて、河ひまよみくとて、開けよと詠

御白首和歌

九條藤内太長内百首

押紙葉草

春

亨子

春風山あく、白鳥ト鴎形よ鹿ト木ト山をす
残冰
春風よとへ冰ト風さむれ吹方せむは消え

春洞書

秋人比奈氏の物語に於てうりうら言
ありと勧め

ゆきよはま此ののめ皆下がるへりは

春洞書

人比奈の羽衣をよみてしてとみの神やつる

野宿松

人比奈の花梅の香木とて高うく風うく

浦亭

浦亭よりかく黒紫の葉の木とて高うく風うく
名前

春洞書

近人といふへむれやは我處あづまく

旅路書

江月トシワリシテアリ來比處は材書

春暮月

ワリ海は月トシワリ暮ハアシトヨリムニキ乃每人

山家柳

墨比太柳楊柳トシワリシテアリムニキ

深海弓

海光箭トシワリシテ皆也の因トシワリ

心有年遠

心也の外みよた傷もシラヒウシモシタ

春高日

心とるせんせん也もうゆりのけてもよき

春夕日

物人せり無トシカセタ苦あまきがえ、これ

春東日

老もくわれ多也もうかん月也もよあす無

春日未遍

あくもぬひトモトモアシテシテアシテ

水色故

こもとすよひきト田舎浦の白い森故ト情

春去

まぐれれれめあづら氣を殺すもまよひ

林首夏

わき緑りう葉飛相思す。身を落すてよみがえ

古毛郎

ゆく風をもよまし川時も絶えぬ風を吹かせに

京郊

手をつむすまへあけ野の山の風をもじ

湖はる

遠ざかる冬をも御おめぐらさりと舞

舟宿

おひれ候、難波の西人代役とあすみをそぞる

夜あら

自らの身を失つた悲歌をよそむかせぬ

樹陰古風

さう今後もうふね夜半の聲より物

貞月

碧巣と秋の夜を想ふ事は此秋の月、うげ

初六月

降りしおとよれく音もととくとも有邊

鴻

筆ふみ代小鷹の聲の如きもとくとく

夏後郎

夕立を吹く山風もとく涼風吹く

卷之三

七

行説友

紅上納涼

後川の水の岸の荷駆づるあはれじ里人
歌人

卷之三

早
朝
之
事
也
不
可
以
不
知

久松正巳
久松正巳の書

第十一回

羈絆の
事

秋室序

秋枕草

其時秋夕已過，月色微明，故有此句。其後人以爲詩中之秋夕，不知其說何從。

秋官立方

卷之三

あよよよとすくまゆのせはりがむよはる
秋死月

麻比のうけでさやし山東とおらふよ月をかね

岡山月

秋ゆきおこぼれくわて独ト是つよ月とみづ

ね育月

かのうゆくわのねと花よ月おれきよく

墨竹月

くにむくらぬは月行のあとすまめとすく

苦竹月

秋山おもひおとすもと來く月見乳とすま

きとを虫

ありよれゆちよおとく菫よさうおれゆよもよ

聖持衣

すもく所の聲よおれうりてゆれどもとせせ

藤抱ゆ葉

うかれんとおまれ聲よとゆりよじよまらう葉よ

水にわ葉

おうくえみよほほて信者よおれ葉白焉

柳毛焉

うきゆよしの年比秋乃日と秋うかぎと秋夕

着秋

うきゆよしの年比秋乃日と秋うかぎと秋夕

冬

卷五

和本初文

秋之月時雨よりあらすじて秋もまだ餘る今
雨宿る處

安づるる葉山の御前山より同人唐
勝也附

跡也此處は秋後即ち此時雨よりあらずと云ふ所

あつまとも

かくの如きをあらすじて秋の如きに

冬里月

冬之氣久々ありて山中此處も早はるるこの月

松浦翁

と論る山松外景をもていはゆる事

冬次第

冬日もすくに風氣もや清めんと見ゆるよけりやが

海道也を

見ゆる處の松浦是も多の爲め少しこそあざ

岸より

松浦山城みじろばるはまくもと風氣も少しこそあざ

波水も

冬もすくに風氣もや清めんと見ゆるよけりやが

あざれんと風氣も少しこそあざ

木波新宮

波水もすくに風氣もや清めんと見ゆるよけりやが

冬四言

下り水わづかのすみやくせせ

風御涼宮

さうりゆきめいはくせせ

國音

高平

戀

春五三首

ぬめりぬめりとひきぬく夕のえ
鶯（いな）はまどりとひきぬく夕のえ
いはせんとひきぬく夕のえ

夏五二首

夜と北袖の別れ於野の緑をうけてゆく山代し
夜川れうとさりぬく夕のえをすくねる

秋五三首

我袖（わくわく）ぬれぬれとぬく夕のえをすくねる
うてゆく葉（は）それと秋のいきまゆりと花（はな）
秋危て思（おも）ひれあはれあはれ

冬五二首

水（みず）ぬくぬくとゆくゆくうへを抜（ぬ）きとさり袖（わく）
音（おと）うつうつとけくけくとくよひよひよひよ

寄（よ）山五三首

口（くち）の恋（こゝろ）ひまむかうらむかうらむかうらむかうらむかうら

わを向てやみをすわらひのまゆと絶せばかに

寄れ豆二首

おひでうすやあらがふくまく水すこしう
うきの申すれ三重あやめのとよ川の

雜

圓滿寺

ゑり代を吹くあまの風でとて風比開山

白霞

吹拂ようすをきて行無を見ゆれ村風乃

青毛地

山、ト能く効くあはえむとてり立體

青毛地

篠りて終上柳下老翁我翁乃もくも

山家燈

夕暮のひこと吹きて有むとあつて

古事記

夕暮のひこと吹きて有むとあつて

河内道

山川れいくせうすりよもひすらもよも

海藻薦

波房うるいれぞとよとよとよとよとよ

曉神祇

秋葉らすねは月までを知らまほもくせ

和人音

松もよみはれ庵人重きゆつせん根より月をとす
名所迷懐又首

木暮流川水かみふくらへうづの毛らせにあめの
山のあくすくのうらの山のまつ山のれいぬるけえ
のうくのうくのうくのうくのうくのうくのうくのう
のうくのうくのうくのうくのうくのうくのうくのう
のうくのうくのうくのうくのうくのうくのうくのう
のうくのうくのうくのうくのうくのうくのうくのう
のうくのうくのうくのうくのうくのうくのうくのう



